
Crock Tower Game

桜クライアント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crock Tower Game

【Zコード】

Z4225F

【作者名】

桜クライアント

【あらすじ】

親に守られていた。政治家に守られていた。先生に守られていた。大人に守られていた。僕らは、世界に守られていた。高校生になって、二年がたつた。僕らはまだ、世界に守られていた。まだ、守られていてもいいはずだった。世界は、12月25日に変わってしまった。

第0章・第1頁、日常（前書き）

中一病全開です
暇な方だけどうぞ

連載ですので
いつ終わるか、さえわかりません
完結はさせぬつもりです

暇つぶし程度になれば幸いです
ではどうぞ

なお、多少なり、気分を害する表現
および、グロテスクな表現を使用する場合がありますので
ご理解の程、よろしくお願ひいたします

第0章・第1頁、日常

親に守られていた。

政治家に守られていた。

先生に守られていた。

大人に守られていた。

僕らは、世界に守られていた。

高校生になって、二年がたつた。

僕らはまだ、世界に守られていた。

まだ、守られていもいいはずだった。

けど、

世界は様相を変えた。

たつた一晩のことだった。

世界は、

西暦、2017年。

12月25日に、

大人を消した。

青森県 十和田市

神崎学園、高等部

「ふう……ひい……せつぶいなあ……」

いまは11月。

まあ寒くて当然、つちゃあ当然なんだけど。

学校に続く坂道を歩いていると、前を歩く長髪で、赤い大きなマフラーを巻いた男が前を歩いていた。

「あ、おーい！ 礼一ーっ！」

俺がそいつの名前を呼ぶと、ダルそうに返事をしながらひつちを向いた。

この、長髪長身、鼻筋がしつかりしていて、目つきの悪い悪人顔の男は、俺のクラスメイトで親友の、花櫻礼一はなつきれいじだ。

俺は礼一に走りより、赤いマフラーを引っ張った。

すると礼一はぐえっと声を上げ、キツい目を俺に向かた。

「てめえ……毎朝毎朝あーっ！…」

いつもの日常。

俺がマフラーを引っ張り、そんなバカを礼二が追いかける。
そんな日常が、俺は大好きだ。

「あいつらは……ほんとガキだねー」

「あつはつはつはーまあ…あいつらのこいとこだな

あそこで談笑してるのは、

男の、これまた鼻筋の通ったパツチリー二重の三白眼、髪の毛をつん
つんに立てたイケメン。

俺のクラスメイトで親友、片桐秀也。
かたぎりしゅうや

通称シユウ。

んで、女のまあ外見『だけは』そこそこかわいいんじゃねえかなあ
とか思つたりしなくもない黒いロングのサラサラヘア。

俺のクラスメイトで腐れ縁。幼馴染の浅原美希。
あさはらみき

自称、美少女みきみき。

たぶん、クラスで一番うるさい5人組だらつ。

「僕は?」

「うわつー?」

後ろから声をかけてきたチビの金髪は俺のクラスメイトで大親友、
ゆすはらゆうじ
譲原雄一

通称ユウ。

いきなり声をかけてきて何を言つてるんだこいつは…。

「いや、なんか忘れられてる気がしてさ」

「お前読心術でも使えんの?」

時計をふと見ると長針が5を指していた

「やつべ……遅刻する……」

そして5人で駆け上がる。

そんな、日常。

普通の、普通の仲の良い、普通の高校生。

なんてことない、ただの繰り返される日常。

朝の日差しと、雪からの照り返しひれいに光る。

そんな、日常。

けど、急に世界は様相を変えて、
俺らにしてみればとんでもない急展開で、
意味もわからず、俺らは温室の外に投げ出されることになつて。

そんなこと、ただの日常から、考えられるわけないだろ?

俺もそうだし、お前らもそうだろ。

そうに気付ってる。

今にして思えば、もひとつこの日を楽しんどけばよかつたとか。
そんなこと思つてるよ。

もつ遅いナビや。

この話に出てくる学園とかそういうのは現実のそれとは一切関係ありません。

が、日本ではあります。

ですが、地理とかはめちゃくちゃです。申し訳ありませんが、ご容赦ください。

桜クライアント：

へたれ

へっぽこ

へんたい

のスリーハのそろつた変人

書く作品も変でみょううちくりんなものが多い。

ファンタジーを書くことが多い傾向にある。

中二病。

「ごひいきにおねがいします」

終業のベルが鳴り、授業が全部終わる。
俺はいつもの「」とく、4人と肩を並べ軽く談笑をしながら家路を歩く。

「明日の授業なんだつけ?」

シュウが言う。

「現代文、数学、現社、倫理、体育、物理だな」

礼一が答える。

「うつわ……だつりー」

シュウが心底、ダルそうに言つた。

とりあえずサボんなよ、とだけ言つておいた。

みんながバラバラになる分かれ道に着き、いつものよつこまた明日ね。といつて別れた。

「ただいまー」

自宅に着き、そう告げると台所から美味しい匂いがして、おかえりーといつ母さんの声が届いた。

今日はカレーかな。

パパッと荷物を置き、リビングに行く。

「お、おかえり、遼！今日はパパさん特製調合ルーで作ったカレーだぞ！」

父さんがなんかいつてる。

「じゃああんま期待しないほうがいいんだな」

くっく、と笑いながら茶化す。

「あらあら。意外と美味しいわよ。パパのカレー」

コトントンとカレーの入った皿を俺の前に出しながら母さんが言った。
……たしかに美味そうだ。

「でもいつだかクソ辛いカレー作ってたよな

「パパさんはいつでもスペイシーな男で居たいんだよ」

はつと鼻で笑つてやつた。

「早く食べなさい二人とも。冷めかけつわよ」

母さんは先に食べ始めていた。

それをみて俺と父さんもいただきますをしてカレーを食べた。

「…………ふう……」

「お粗末さまでした」

「ひなたひさまをいつと『どうだ、遼、感想は』といわんばかりのキラッキラした瞳で俺に訴えかけてくるオヤジが居た。

「つたぐ。うまかつたよ。珍しく」

「本当か!?いやあ……パパさん頑張った甲斐があるつてもんだ!-はつはつはつはつは」

満点の笑みでうれしそうに高笑いをする父さんを見て、なんだか俺はうれしくなった。

「あら、もつあがるの?」

「うふ。今日は早めに寝る。フロ、先に入るね」

そつ告げてお風呂に向かった。

脱衣所で服を脱ぎ、シャワーを出す。

ふう……。

お風呂が好きだ。

疲れが取れる。

最近はいろいろ幸せだ。

家族仲もよくて。4人が居て。学校で5人でわいわいして。幸せな日々だ。

「……よつしー。」

キュッとシャワーを止め、風呂場を出る。

服を着て、自分の部屋に行つて、ベッドに倒れこんだ。

ああ……疲れた。

そしてそのまま、まどろみに身を任せ、ゆっくりと深い眠りについた。

そして夢を見た。

5人全員が社会人になつて。

それでも、飲み会で騒いだりしての夢だ。
そんな未来なら、どれだけいいだろう。
いつまでも仲良くしていられる。
俺にとっての一番の幸せだ。

幸せな夢を見て

そして朝。

異常なほどの静けさで、俺は目が覚めた。

異常な静けさ。

朝特有のキンと冷え切つた感じもせず、なんだか生ぬるいような気味悪い感覚。

そして、家に人の気配がない。

「……一人とも出かけたのかな？」

とりあえず学校に行こうと思い、着替えを済ませる。

あの年増のバカップルのことだ。

どつか旅行にでも行つたんだろう。

氣にするほどのことでもない。

なんか生ぬるいのは地球温暖化とかなんかそんなのの影響だつたりしなかつたりするんだろう。

まあいいや。

「さて……と」

学校用のバッグを肩にかけ、家を出る。

玄関を出てとりあえず『いってきます』といつて鍵を閉めた。

外に出て学校へ続く道を歩く。

歩いて、時間が経てば経つほど、胸の奥に違和感が膨らんでいく。魚の小骨がのどにひつかって、なんかそれが取れないような、そんな引っ掛けがある。

ふと立ち止まって、周りを見渡す。

俺の横を通り過ぎる、黄色い帽子をかぶった小学生。子供を見送った後に、家の前で井戸端会議をしているおばさんたち。いつてきまーすと元気に叫ぶ女の子。

小鳥のさえずり。

衣擦れの音。

その全てが、無い。

いつもならそこにありふれる音、物、人、それらが無い。人の気配が、動物の気配が、ここに無くなっていた。

風もほとんどと言つていよいよ無く、時々吹く風に木立がざわざわと音を立てる。

音なんか、それだけしかしなかった。

人のざわざわという声と声が混ざった音なんかは、一切しなかった。

異常な静けさ。

怖いほど、静かで。

「……なんか……氣味悪い……」

思わず口に出し、（怖かったとかそういうわけじゃない。断じてだ）学校までの道を走った。

学校に着き、自分の教室へ急ぐ。

やつぱりおかしい。
絶対に。

なんで登校してる人が一人もいないんだ?
学校も、夜中に来たような不気味な静けさ。
人気の無い気持ちの悪い静けさ。

その中に響く、耳鳴りのピーというけたたましい音。
教室の扉を開けると、いつもの4人がそこにいた。

第1章・第4頁、崩壊（後書き）

この話からが本編と言つても過言ではないと思ひます。
中一病が炸裂し、ゆつくりと話が進んでいきます。
どうぞ長い目でみていくください（笑）

桜クライアント：

へたれ

へっぽこ

へんたい

のスリーHのそろつた変人

書く作品も変でみょううちくりんなものが多い。
ファンタジーを書くことが多い傾向にある。

中一病。

ごひいきにおねがいします^_^

「……お、お前ら……」

俺の口から出た第一声だった。
いつもの4人。

「…………？」

美希が口を開けた。

「な……よかつた……お前が居てくれて……」

シユウが言った。

いまいち状況がつかめない。

なにがどうなつて……。

「氣づいてるだろ?」

礼一が俺に問いかける。
何を?

「……登校途中。見てきたはずだ。異様な光景をな

礼一が言った。

「……そうか……」

それか。

「理由も何もわからないが、なぜか今、町には人っ子一人居やしない」

礼一は続ける。

「周りをぐるっと見てきたが、やっぱり人は居なかつた。もしかしたらと学校に来て、お前らが来るのを待とうと思つていたら、案の定、みんな来てたつてわけだ」

「え……あ」

頭が、回転しない。

状況把握を恐れていいるのか。

そんな……バカな話。

あるわけがない。

夢、に違いない。

「……リョウ」

シユウが口を開いて俺に言った。

「……夢なんかじゃ、ない」

ぐらりと世界が反転する。

目の前がゆつくつとひびつき、薄暗くなつたときにはもう力が抜けていた。

「おー！ リョウ！」

ユウが駆け寄ってきた。

「眩暈？ 大丈夫か？ これ以上心配事を増やさないでくれよ？」

この野郎……。

「俺の……体のことはどうでも良いってか……このバカ」

「つたく……そんだけ吠えれりや元気だね。立てよ」

ユウの肩を借りて起き上がる。

実際に見てきたんだ。

だからわかる。

そうか、夢なんかじゃない。

けど、バカげてる。

なんなんだよ、これ。

「さあてなー……わつけわかんねえ。大人も、子供も、ガキも、うるせえ近所のババアも居ねー。集団失踪？ 寝てる間に避難勧告でも出たか？」

シユウが可能性を挙げていく。

「戦争？ 皆で避難？ 大人たち全員でどうか行つたか？ なら子供は？」

失踪事件？ならなんで俺たちは生きてる？」

シユウが頭をガリガリ搔き鳴りながら顔を顰めている。

情報なしの推測など、ただの妄想に過ぎない。

頭の回転がまだ遅い。

理解しようとしてもしないのかもしれない。今まで、この状況に順応できていない。

うだうだと、漠然と推測を広げてそれを妄想だと認識することをわざと避け、理解しようと、把握しようと、努力した。

しかし、妄想は妄想だった。

その数十秒後に、その妄想は搔き消された。

最初は不気味な音だつた。

「なんか聞こえないか？」

気づいたのはシユウだった。

「…確かに…聞こえるよね」

それに美希が同意して、全員がその音を聞き取った。

その音はだんだんと近づいてきた。

その音が大きくなつて、耳が異様さを感じ取ったとき、ズンと重い音の後、床が揺れた。

「じ、地震！？」

美希が叫ぶ。

「もーーーなんなんだよッ！なんでこんなにいろいろ重なりやがんだよーーー！」

シユウも叫ぶ。

「……」

ただ一人、地震に怯えることなく
ユウが顔をしかめて、外をにらんでいた。

「ユウ！？」

俺は叫んだ。

「地震じゃ、無い」

コウは外を睨んでそう言った。

「…え？」

全員の精一杯の感想だ。

窓の外。

校庭の向こうに広がる、森に近い雑木林。

そこに立つ、大きな、塔…？

堂々と、そこに突き刺さつた塔は、なんとなく神々しさを纏つているような、不気味なものだつた。

地震は收まり、何とか落ち着いて窓の外を見ることが出来るようになつた。

あれは……
なんだ……？

第1章・第5頁 崩壊 -2(後書き)

sok oni sob ieru to uha
tadasi sobe tewo o
mitosube tewo o
tonisuke oyouni
sokonisuke oyouni
tonisuke oyouni
sokonisuke oyouni
tonisuke oyouni

第一章・第6頁、はじまり

「なん……だよ。ありやあ」

シユウが言った。

誰もが思っていたらしく。

地面から突き出たあれは……。

「塔……みたいだよね。中に入れる構造かはわからないけど」

ユウが分析し始めやがった。

するとシユウが問題はそこじゃねえと諭した。

「なんで地面から生えてくるんだ?意味がわからねえ」

それは確かに、と思つた。

この時氣づくべきだった。

この状況の異常に。

いや、既に気付いて居たのかもしれない。

ただ、色々なものが、神経とか色々。

そういうものが麻痺していて、

理解するのを避けようとしてるような。

それは、俺たちの、世界への最後の足掻きだったのかもしれないんだ。

まあ……全部無駄だつたんだけどさ。

頭を抱えながら、麻痺した頭で色々摸索していた僕たちは、妙なぬいぐるみを見つけた。

「なん……だ？」これ

「……ふつやこべー」

シユウの怪訝そうな言葉に次いで、美希が苦笑いをしながら言った。

「……失敬な女だぜ」

全員が唖然とした。

そのぬいぐるみがしゃべったからだ。

「なつ……しゃべつ……」

コウは、まさかといった表情で手を擦っていた。

美希は口をパクつかせて、ショウは手を見開いていた。

礼一は真顔。

まあいつものことだ。あいつのポーカーフェイスは。
俺はといえば……もちろんビビってなんかない。

真つ先に飛び退いたのは……もちろん安全のためだ。

「あー……あー……ああ」

ぬいぐるみは手（？）で頭をがりがりと搔くと
ふわりと浮いた。

「うわー？」

真つ先に声をあげたのはコウだった。

コウは頭がいい。

それはもう天才と謳われるほどだ。

なのになぜこの高校に来たのか……はまいまはいいか。
だからなんで浮いてるのかとかそんなので頭を抱えているんだろう。

「お、お前は……なんだ！？」

ショウが聞いた。

「あ？ あー……えつとー……ちょっと待て」

やつぱり、ぬいぐるみは腹の辺りをがりがりと搔き始めた。

「えー……あー……了解了解。えつとだ。プリセット……。これが。

よし

なんだかよくわからないうとを「ふつぶつと齒ごて、やつともとも」と
喋りだした。

「あー……ではですね。聞きたい」とは「ほどあると思」いますが
……あー……とつあえず。説明しなきゃなんねー……ああ……説明し
なきやなつませんので、まあ御静聴願えますかね」

みんな畠然としている中、ぬこぐるみは淡々と喋る。

「まあ……簡単に説明をせいでいただきまおと……」

第一章・第7頁、ゲーム

ぬいぐるみは淡々と俺達にここがなんなのか。
何が起きているのか。

これから、なにが起きるのかを。

「えつと……ですね。あなた方は、今回、我等が主が主催するゲームに、強制参加していただくことになりました」

「…………はあ？」

シユウが顔をしかめて言った。
するとぬいぐるみがじろりと睨み付けてきたので、シユウは黙り込んでしまった。

「どこまで喋つたけな。あー……ああ、そうか。そう、あなた方はゲームのプレイヤーに選ばれました。えーとりあえず……ここまでで質問ありますか？」

「お前は……何者なんだ？」

シユウが聞いた。

「あー……それは追々説明すんぜ。他には？」

「ゲームって……どんな？」

次はユウが聞いた。

「ああ、じゃあついでに説明しとくか。あー……ゲームの内容は、簡単に言えば……陣取りゲームだな」

「じん……とり?」

美希が聞き返した。

するとまたぬいぐるみは喋り始めた。

「やつ。陣取りゲーム。今現在、日本の全ての都道府県には5つずつ、時計台が生えている。時計台は簡単に言えば地区の固定と地区責任者、及びプレイヤーの基本拠点になる。どういうことかというと、全ての都道府県が5つに分断されている。全て微妙に別の位相に配置してあるから、違う地区への不法侵入は許されない。許されないというか、不法侵入は『できない』といった方が正しいか」

…突拍子がなさすぎて頭がついていいかない。

「それで?」

今までポーカーフェイスで、なにも喋らなかつた礼一が口を開けた。

ぬいぐるみは「ヤリと口角をあげて礼一に向き直る。

「良い瞳だな。くくく。こここの地区責任者でよかつたぜ。色々、」

「退屈しないで済みそうだ」

くくくと気持ち悪い笑い声をあげてぬいぐるみは笑った。

「あー……めんどくせーんで敬語は無しで行くぜ。んでだ。まあ察しが良い奴は気づいてるかもしけんが、ここにも、あの時計台がある。あれが、てめーらの拠点になる場所だ。他の地区にも、5人のプレイヤーが居る。そして、陣取りゲームの名の通り、てめーらには陣取りをしてもらう。何をすれば良いか。それは、該当地区的制圧。制圧の方法はひとつ

「該当地区的プレイヤーの殲滅」

「い……意味がわからねえ！」

「人の話はちゃんと聞くもんだぜ。言い方を変えるか?つまり、てめーらはてめーらが侵攻する地区的プレイヤー5人を、殺せ」

「ふ、ふざけんな！」

シユウが叫んだ。

「ふざけんなよ！バカバカしい！そんなバカげた話あるかよ！」

シユウがキレてる。

俺はただぼーっとしていた。

殺せ。

その一言に引っ掛かりながら。

「制圧するか制圧しねーかはてめーらの判断次第だ」

「え…？」

シユウが唖然とした。

「制圧すれば、5人が死ぬだけで済む。だが、制圧せずに12時間が経過した場合、その時は10人死ぬ。わかるか？」

ユウがはつとした顔で言った。

「ま……まさか」

「察しが良いな。そうだ。12時間が一回に許される戦闘時間だ。つまりタイムリミットは12時間。12時間以内にどちらかが5人を殲滅できなかつた場合、両チームの残りの人間は死ぬ」

くくくと笑うとぬいぐるみは続けた。

「やるやらねーは自由だぜ。5人死んで終わるか10人死んで終わるかの違いでな。くくく」

「つまり」

礼一が口を開けた。

「相手を殲滅しなきや、俺らが死ぬだけ。だから勝手にしろか。上手い脅しだな。俺らはそもそもそんなことしたかない。ここはなんだ。なぜ大人たちや俺ら以外の人間がいない？」

「質問はひとつずつにしろよ。礼儀がねえな。ここはなんなのか？んなもん察しろよ。はあ……ここは、てめーらの世界を基準0としたとき、ここは2だ」

意味がわからない……

「まず世界をペラペラの紙に例える。次に何もない虚数空間にそのペラペラの紙が何枚か重なつてると考えるわけだ。基準0の紙がてめーらの世界。その上にも無限に世界の紙が。下にも無限に世界の紙が。そのうちの+2がここ。『0の模倣』と呼ばれる場所だ。簡単に言やあ……ここは異世界だな。何故+1ではないかはまあ置いとくか。そういうことだ。大人共がいねーのも異世界だから、だな」

礼一はなるほどと「う」とまた黙った。
そしてまたぬいぐるみが喋り始めた。

「おつと、自己紹介がまだだつたな。俺様の名前は、アマコト」

「天声……？」

「まあ漢字は好きに当てる。漢字の概念は無いからな。俺様はある

時計台の護り神にして地区責任者。まあこれから暫くの間、仲良くなれるよ。

そうこうして、アマコはニヤニヤと笑った。

第一章・第7頁、ゲーム（後書き）

アマコエが言っていたペラペラ世界の概念。あれに登場した+1の世界は、ふとした拍子に開いてしまう一番近い異界といえる。神話等に登場する神や化物の類いは、全てそこから現れる、とアマコエは言つ。+1の世界は ± 0 （てめーらの世界と称していたことから、私たちの現世のことと推察して良さそうである）の世界には無い粒子や、原子、エネルギーが奔流を起こして散乱している。それらは ± 0 の空氣に触れた途端に凝固し、特殊なエネルギーを宿して苟の命を持つていてるよう振る舞う。それらが常軌を逸した形状をしているため、私たちの祖先はそれを神としたり、悪魔としたりしたのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4225f/>

Crock Tower Game

2010年10月15日17時59分発行